



北・その自然と人

札幌市博物館活動センター情報誌 ミューズ・レター

# Muse Letter

札幌市博物館活動センターは自然史博物館の計画推進のため、市民とともに教育普及活動、展示・交流、調査研究、資料収集保存を行う活動拠点です。

2015.3 No. 60

発行・札幌市博物館活動センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ内5階

TEL 011-200-5002 FAX 011-200-5003 <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

## ビル街で、カモメが子育て

寄稿 文・写真:長谷川 理(エコ・ネットワーク)

4月から8月頃にかけて、博物館活動センター周辺(中央区北1条西9丁目)は、白い大きな鳥オオセグロカモメ(写真1)が飛び交います。通常カモメの仲間は海岸で暮らしますが、10年ほど前から札幌市内のビルの屋上で繁殖する個体が増えてきました(写真2)。

なぜ、こんな街中で生活するようになったのかはよく分かりません。エサが豊富にあるからなのか、子育てが安全にできるからなのか。私たちの観察結果から、大通のテレビ塔の周辺や、中央区役所の周辺に、比較的たくさんの巣が集まっていることがわかりました。展望台のある高いビルにあがって見渡すと、ビル街で海鳥が子育てをしているという不思議な光景を目にすることができます。

博物館活動センターの西側にある立体駐車場の屋上にも営巣しています。センターのある5階からは、隣の屋上を見上げるかたちになるため、巣や卵、小さいヒナは見えません。それでもしばらく観察すれば、繁殖をしていることが分かります。なぜなら、親鳥がいつも同じ場所にじっとしているのは、卵を抱いて座っているか、小さなヒナを守るためだからです(写真3)。つまり、その場所には巣があり、繁殖が行われているといえます。

子育てはオスもメスもいっしょに行います。雌雄

の見分けは難しいですが、ときおり二羽の親鳥が、抱卵や子守り役を入れ替わる様子が見られます。一回の繁殖で産む卵の数はたいてい3個で、全ての卵が無事にかえれば3羽のヒナを育てることになります。ヒナが大きくなってくると親鳥たちは一日に何回も屋上を出入りしてエサを運ぶようになります。やがてヒナが親と同じくらいの大きさになると、屋上のふちにその姿を見せてくれます。目つきのするどい成鳥とはちがい、全身が灰色のヒナは、つぶらな黒目のかわいらしい顔つきです。ときおりバタバタと翼を上下に動かして、飛ぶ練習などしています。そして、7月から8月頃に巣立ちます。

海で生活している場合は、巣のある崖から飛びたつとそのまま海面にあります。もし上手に飛べなくても、陸上の捕食者が近寄れないため安全です。しかし、ビルから飛び立って道路上に降りてしまうと危険がいっぱいです。そのため巣立ったヒナの多くは、豊平川の中州に集まるようです。秋にはすっかり飛ぶのも上手になり、みなで海へと移動し、札幌の街中からカモメの姿は消えます。

さて、今年もそろそろカモメたちが戻ってくる季節です。みなさんもぜひ札幌の街中にいる海鳥の観察を楽しんでみてください。



写真1: オオセグロカモメ(成鳥)



写真2: 屋上の巣と卵



写真3: 屋上で子育て



写真4: オオセグロカモメ(ヒナ)

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse(ギリシャ語)と通信や手紙を意味するLetter(英語)からMuseLetterと名付けました。



松浦武四郎の生家（三重県松阪市）

武四郎の銅像  
(松浦武四郎記念館)

## 松浦武四郎の南区縦断の旅

南区は札幌市の面積の6割を占めるだけでなく、札幌岳など標高1000メートルを超す山が17座もあり、その一部は支笏洞爺国立公園となっています。いまでさえ手つかずの森が残る山々の中を、道もなかった時代に歩き切った人物がいます。今回は、その探検家・松浦武四郎の記録から札幌の自然の奥深さを紹介しようと思います。

武四郎は計6回の蝦夷地探検を行い、そのうち4回、石狩・札幌を訪ねています。最後の旅となる安政五年(1858年)の日誌を読むと、今の暦で2月の極寒期に洞爺から歩いて札幌を訪ねたことがわかります。その旅は、まず洞爺から喜茂別に入り、現在の中山峠より北側にあたる喜茂別岳の尾根を越えて薄別川に出て、豊平川に入ったと思われる。日記によると途中で洞爺湖が一望できる場所を通過して、そこは現在「武四郎坂」と呼ばれています。豊平川に入るとほどなく岩の間から温泉が噴き出している場所で体を温め、野宿します。これが今の定山溪温泉です。翌日は豊平川右岸を歩き、簾舞から藤野を通り、「ヲコシナイ」(今の石

山付近?)で野宿します。この時、あまりに寒く、案内人のアイヌの飼い犬を抱いて寝ています。翌日氷のはった豊平川を渡り、その冷たさのあまり歩くのもやっつという状況で、藻岩山のふもと(現在の川沿?)付近でアイヌの家に転がり込み、心からのもてなしを受けて救われます。その後、発寒を通過して銭箱に着き、そこから石狩を訪ねて旅を終えます。

武四郎の生家は現在の三重県松阪市にあり、家の前には伊勢神宮に続く「参宮街道」があり、子供の頃から多くの旅人を目にして育ちました。その環境が、武四郎を16歳で放浪の旅に発させたのかもしれない。生家の近くにある松浦武四郎記念館には実物大とされる武四郎の銅像が展示されています。それは、前人未到の北海道の大地を縦横無尽に探検した屈強な体格には見えませんが、その眼差しには不屈の強い意志がみなぎっています。そして、歴史的資料である彼が残した日誌からは、当時の札幌はじめ北海道の自然のありさまを読み取ることもできるのです。(古沢)

**(仮称)札幌博物館基本計画(案)  
について、たくさんのご意見  
ありがとうございました。**

**みなさまのご意見を反映し、  
3月末に基本計画を策定します。**

情報はホームページなどで、その都度お知らせいたします。

※いつ、どこに、どんな博物館ができるかは、来年度以降の検討事項で未定です。

# 行事報告 この冬は、大人向け講座が目白押しでした。

## 実践！エゾシカ皮なめし探究会

共催 環境NGOカピウ、札幌市博物館活動センター  
 講師 伊吾田 宏正さん(酪農学園大狩猟管理学研究室准授)、松浦 友紀子さん(森林総合研究所研究員、TWIN代表)、長谷川 理さん(環境NGOカピウ代表、エコ・ネットワーク)、板倉 来衣子さん(酪農学園大学学生)

家庭でもできる方法をみんなで試してみよう!という趣旨で開催しました。定員10人に84人が応募し、博物館活動センター史上最高の倍率でした。エゾシカが増えすぎたため、適度な頭数にするために狩られていること、利用を考えていかなくてはならないことを意識している方も多いことがうかがわれました。



## プラスティネーションによる動物標本作製講座 全3回

共催 札幌市博物館活動センター、CISEねっと  
 講師 工藤 智美(動物標本・教材製作サークル・ボランティア「えぞホネ団」)

標本の作り方には様々な方法があり、それぞれ目的や利点があります。プラスティネーション標本は、展示用や教材用の標本をつくれる、ちょっとプロ仕様の技です。最終日は活動センターの収蔵庫ツアーも行いました。



連載!

## 札幌っ子 大杉解説員の じのスケッチブック

### Page 12 論文で家族の会話が増えるかも?!

博物館活動センターの図書コーナーには図鑑や絵本をはじめ、専門的な図書にいたるまでいろいろな本があります。展示解説員は、これらの図書資料の整理もしています。特に冬は図書整理をする時間が長くなり、本や論文のタイトルにひかれて、ちらちらと中身にも目が行ってしまいます。その中で見つけた、北海道開拓記念館研究紀要という冊子。題名は「専門家向けだ」と思わせませんが、中には思わず本気で読んでしまうような論文が！そして、そこには自分の知らなかった世界が広がり、素直におもしろいと思う内容だったので紹介します。

皆さんは節分の豆まきに使う豆と言ったら、落花生か大豆どちらですか？その論文「大豆から落花生へ-節分豆の変化をめぐる-考察-」は、全国各地で行ったアンケート結果から、節分の時に使う豆が大豆から落花生へどのように変化していったかについて、地域文化の背景など様々な視点から考察しています。論文によると、大豆から落花生に変化するはっきりとした境界線は、新潟県と富山県および群馬県の県境付近だそうです(引用文献:池田貴生 2001. 大豆から落花生へ-節分豆の変化をめぐる-考察-. 北海道開拓記念館研究紀要第29号, p. 109-134.)。

後日、生まれも育ちも札幌の私が、函館出身の母に「うちは落花生だよな？」と聞いたところ、「節分と言えば、煎った大豆をまくでしょう。落花生をまいたのは、すぐにおいしく食べる事ができるからだよ」という会話が繰り返されました。家庭のそんな「ありふれた会話」にも、この論文は何の違和感なくなじみ、しかも会話の中で生まれる謎を解くヒントをも与えてくれます。

皆さんも豆まきの小さな豆から地域差や文化の違いといったスケールの大きな話題を語り合ってみませんか？

写真:ラッカセイ(落花生)  
 節分をすぎても運良くコンビニに売られていたもの。本当は家に残っていた落花生を使いたかったのですが母に食べられてしまい、方々を探しまわって入手。



# 行事おしらせ いずれも参加無料、多数時抽選



## 科学絵本よみきかせ & 学芸員の井戸端サイエンス

4/25(土) 14:00~14:30

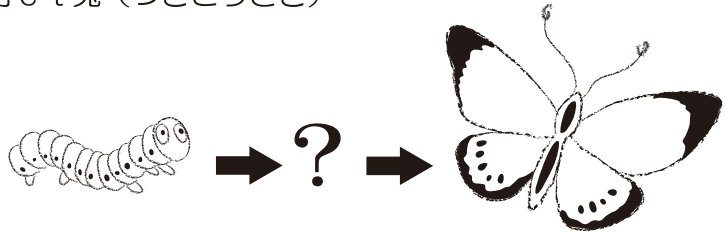
テーマ おおきくなると、ヌケガラになる?!

対象 3歳~大人 申込不要、無料

会場 札幌市博物館活動センター展示室内  
読み手 絵本よみきかせユニット・月e t 兎 (つきとうさぎ)

絵本の題名

- 「やさいぎらいのガジガジ」
- 「ヘビのひみつ」
- 「たま、またたま」



## 札幌市博物館活動センターご案内



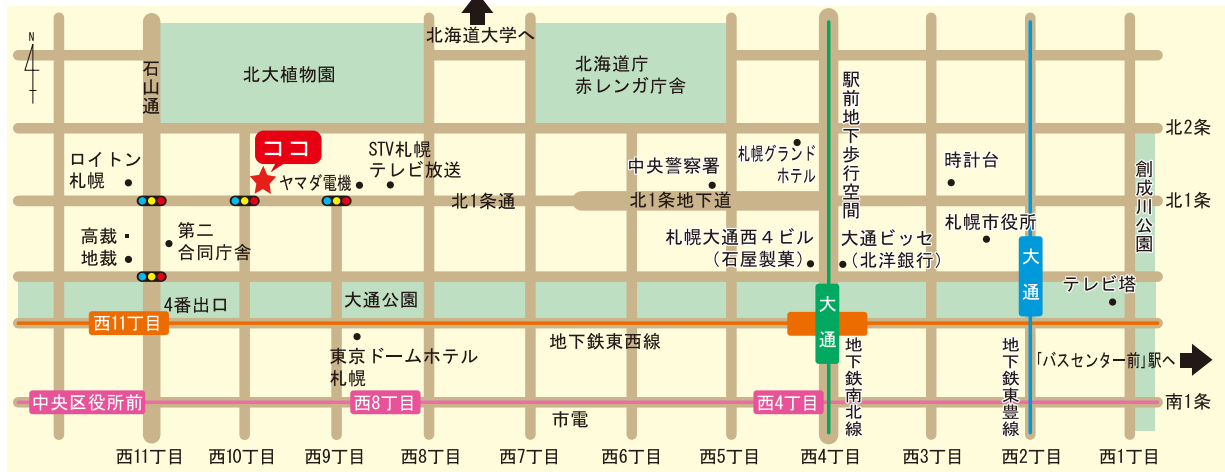
ホームページ <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

来年(2016年)4月から平岸に移転します。

【開館時間】10時~17時 【入館料】無料 【休館日】日・月曜日、祝日、年末年始(12/29~1/3)

【住所】〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ5階

【電話】011-200-5002 【FAX】011-200-5003 【E-mail】museum@city.sapporo.jp



### ■公共交通機関をご利用ください。

- <地下鉄>東西線西11丁目駅4番出口徒歩5分。
- <市電>西8丁目または中央区役所前電停徒歩8分。
- <バス>北1条西7丁目バス停徒歩3分。

- 札幌駅前地下歩行空間を大通方面に向かい、北1条地下道へ右折し、最も西側の出口(右手)から地上へ出て、そのままヤマダ電機の方向へ直進、徒歩約5分(合計徒歩約15分)。

## 編集後記

今回60号を迎え、久々に寄稿をお願いしました。カモメは体も声も大きく目立つだけに、増えたのはなぜ?と知っている人も多いはず。その疑問を解くため、長谷川さん達は観察を積み重ねています。さて、活動センターから観察する限り、流水初日ならぬ「カモメ初日」は例年3月上旬です。今年は何日にカモメが戻って来るか、予想して楽しんでます。(ま)

累計来館者数 **96,143人**

(2015年1月末現在)



さっぽろ市  
02-J02-14-784  
26-2-644



ミュージズレターは、再生紙および植物油インキを使用しています。